京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

Title	[書評]Nicole Mozet, Balzac au pluriel, PUF, 1990
Author(s)	村田, 京子
Citation	仏文研究 : Etudes de Langue et Littérature Françaises (1992), 23: 197-200
Issue Date	1992-09-01
URL	https://doi.org/10.14989/137784
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

《書　評》

Nicole Mozet, *Balzac au pluriel,* PUF, 1990

村　田　京　子

バルザックのPléiade新版La　Comédie　humaine全12巻は，1976年から1981年にかけて，Pierre-Georges Castexの監修のもとに出版された。この版の特徴の一つに，様々な下書きや校正刷りなど，主なヴァリアントを殆ど収録していることが挙げられる。更に，『人間喜劇』から除外された作品（*Contes drolatiques* 等）を扱った *Œuvres diverses* が，新たに3巻予定され，その第1巻が1990年に出版された。Roland Chollet等と共にその編集にあたったのが，本書の著者Nicole Mozetである。Pléiadeのこうした企ては，単に，『人間喜劇』の作品のみを対象とするのではなく，それ以前の未完の作品も含めて，統合的にバルザックを捉えようとするものである。

ニコル・モゼは，本書において，序文や献辞も含めた，これらavant-textesを考慮に入れることによって，バルザックのテクストに内在する多義性を明らかにし，その意味を歴史の中に位置づけながら，解明しようと試みている。モゼは，バルザックのエクリチュールを，大胆で挑発的であると同時に，慎重で逃げ口上的言辞を駆使する，矛盾に満ちたものであるとし，「策略のエクリチュール」(une écriture de la ruse）と名付けている。この「策略のエクリチュール」をバルザックが，どのような理由で，どのような形で用いたのかを，明らかにしようとしたのが，本書である。

本書は5章に分かれ，第一章《Pourquoi écrire?》，第二章《Pourquoi décrire?》でまず，バルザックの，作家としての根源的な立場に言及している。第一章では，幾つかの作品や序文を取り上げ，バルザックの創作態度と，『人間喜劇』の辿った軌跡を追っている。とりわけ，歴史と作家との関わりが興味深い。ここでは，王政復古から1830年の革命を経て，ブルジョワジーの台頭が決定づけられた，7月王政の時代に生きるバルザックに焦点が当てられている。彼は，シャルル10世の退位を，象徴的な「父」の死とみなし，過去の家父長的な世界をなつかしんで，30年以降の社会を，無能・卑小さのはびこる社会であると弾劾している。しかし，彼は「幻滅派」に属しながら，芸術家，とりわけ作家が，真理に深く根ざした「典型」を創造することによって，世界に一つの意味を与えることができると確信している。社会的忘却の彼方に消え去ろうとするものを掘り起こし，間違いを正して真実を伝えようとするバルザックの態度を，ニコル・モゼは，考古学者の姿と重ね合わせ，『人間喜劇』全体が《thème de restitution》を構成していると言う。しかしながら，1830年の革命後10年を経て，古き良き封建制が永遠に葬り去られ，ブルジョワの支配が確立された時，バルザックは，いかなる《restauration》も不可能であることを悟る。それは同時に，プロメテウス的な芸術創造の終焉を意味し，労働と結びついた芸術の時代の幕開けである。モゼは，1840年を『人間喜劇』の転換点とみなし，40年を境に，バルザックの視点は過去から現在へと移行し，ブルジョワの特性である「凡庸」「卑小」「醜さ」に興味を抱き，ポンスの絵の収集のように，収集することに，作家活動の原点を見出すようになったと分析する。また，「父」の決定的な死を認識するのに10年かかったように，バルザックのエクリチュールは常に，書く対象（Passion, Moi, Histoire）から少し距離を置いて，第三者の眼で複眼的に捉えることによって成り立つと，指摘している。

第二章においては，『人間喜劇』における場所の描写を取り上げ，描写のもたらすシーニュを手掛かりに，作品の深層に横たわる意味を解読している。特に，文学がsexualitéを語ることがタブーであった19世紀において，場所の描写が単に，地理的情報を提供するだけではなく，暗号化されたメッセージである

ことを，モゼは *La Vieille Fille* の舞台となる Alençon の町（＝女性の体）の解読作業を通じて明らかにしている。地方（特に，生まれ故郷の Touraine 地方）は，バルザックにとって母胎を意味し，「父」の死後，「母」への回帰が企てられるのだ。更に，第四章でも言及しているが，モゼは，19世紀の文学と地方との関わりに注目し，今まで倦怠と追放の場として描写に値しなかった地方が，バルザックの時代になって，急に脚光を浴びるようになった現象を，文学的・歴史的側面から分析している。その理由の一つは，時間・空間的に遠い世界を題材にした古典主義文学に代わって，身近な世界に新しさを見いだそうとした文学的要請によるもの。二つ目には，当時のブルジョワの典型として，故郷からパリに出た青年が，常に自己の場が問題にされる，不安定な都会において，自己のルーツを辿るために，母なる地方へ一旦，立ち戻る必要が生まれ，地方をめぐる考古学的テクストが作家に要求されたため。モゼは，このロマン主義的地方神話[Paris＝virilité, culture; Province＝féminité (maternité), renoncement]が，フローベールの『ボヴァリー夫人』の登場によって打ち砕かれ，第二帝政期のフロマンタンに至って，作家の態度が，archéologue から régionaliste へ推移していく有り様を追跡している。また，バルザックの地方描写においても，モゼは第一章同様，1840年を境に，貴族的過去へのノスタルジーの場から，権力・財産を求めるブルジョワの征服の場へと，視点が変化していることを指摘している。

第三章《La part des femmes》においては，19世紀ブルジョワ社会のタブーである，Femme と Peuple のテーマに対するバルザックの取り組みに触れている。ここでは，社会的疎外を受けた Femme-Peuple の持つ潜在能力（次第に力を蓄え，破壊的なエネルギーを発揮する可能性）を，社会的検閲の網の目を潜って，バルザックがいかに巧妙にテクストに織り込んでいるかを，*La Fille aux yeux d'or* や *La Cousine Bette* 等の解読作業を通して，明らかにしている。とりわけ，女性作家についての項は，現代にもあてはまる問題を孕んでいるように思える。モゼは，*Béatrix* に登場する女性作家 Camille Maupin（スタール夫人とジョルジュ・サンドがモデル）を取り上げ，Camille と Calyste の間に起きる，ラディカルな性の役割の転換（男の Calyste が欲望の対象，商品の役目を負う）や，母性を神聖化する，ブルジョワの女子教育の規範に反した Camille の生き方を提示することで，バルザックは大きなタブーを犯していると指摘している。しかし，それと同時に，物語の偽善的結末（Camille が今までの生活を恥じて修道院に籠もり，Maternité の勝利に終わる）に，ブルジョワ作家バルザックの限界を見ている。更に，作者の，女性作家への激しい嫌悪がどういう理由によるものかを考察したのが，未完の作品 *La Femme auteur* についての分析である。モゼは，女性が書くことは，社会的・道徳的規律に違反するためだと理由づける。バルザックによれば，作家は僧侶に等しく，どちらも，人々の心の内奥まで入り込み，想像力によって他者の生を生きる《seconde vue》を備えている。その上，今や，印刷術の発達によって力を増した作家は，僧侶に代わって，世界中に言葉を広め，軍隊のもたらす勝利と同じ重みをもって，社会的に活躍することが出来る。即ち，作家は，僧侶と将軍の役割を担うもので，この純粋に男の分野の職業に女性が進出することは，男性の権威への侵犯を意味する。一方，作家という職業はもともと，匿名のもとに仕事ができ，女性の肉体に関して，当事者の女性の方が主題をより内面化できる点等で，女性に適したものであり，男性作家は女性の侵入に脅威を覚えたとも考えられる。Camille Maupin は，現実における，女性作家の登場の兆候とみなせるが，それと同時に，バルザックにとって，悪魔祓いの役目を果たしていた。他方，道徳的な面での規律違反は，男女を問わず，作家活動固有の危険性に由来する。作家は，宗教という後ろ楯に守られた僧侶と違って，人間の情念から身を守る術を持たない。保護装置のない状態で，想像力を駆使すること，肉体をも巻き込んだ自己投入には，死の危険すら伴うことは，バルザックが身をもって経験したことである。それに加え，ルソー以来，自伝文学の登場によって，作者と語り手との距離が消え，主題も個人の問題が扱われるようになった。近代小説の作家は，作品と作者が同一視される危険に常に晒され，書く行為は「思想の売春」にあたるとバルザックは語っている。書く行為と「処女性」が両立不可能とみなされていることも，女性を作家活動から排除する原因となっている。モゼのこのような考察は単に，バルザックの時代のみならず，現在にも通用する，女性作家批判に対する鋭い分析であり，また，作家という

存在の危うさという点でも，的を射た指摘と言えよう。

第四章の《Codes et contraintes》では，読者と作家の関係を問題にしている。近代小説は，時代の主流をなすイデオロギーに対して，闘争的立場を取り，真実を暴く使命を持っている。しかし，商業主義の発達した時代において，作家は，少数の選ばれた読者だけではなく，作家を知らない大多数の読者を相手にしなければならない。大衆は常に，文学に対して，耳慣れた言葉と新奇なものとの微妙な取り合わせを望んでいる。新奇さへの大衆の要求に答えて，バルザックは，今まで否定的要素であった，地方・女性・私生活等に新しい光を当てた。しかし，新奇さ，真実をあまりに追求しすぎると，大衆の理解の限度を越えてしまう。そこで，ブルジョワの道徳の枠内に留まりながら，真実を語るというジレンマに陥ってしまう。それが，*Le Curé de village* の謎めいた話の展開や，*Le Lys dans la Vallée* の結末のモルソフ夫人の不可解な言葉となって現れている。モゼは，モルソフ夫人の告白部分を，バルザックの自己検閲の顕著な例として挙げている。彼は，不道徳というベルニー夫人の非難を受けて，この部分を大幅に削除したが，それによって，オリジナル版では，エロチシズムを肯定するモルソフ夫人の言葉に説得力があったのが，単に，瀕死の病人の錯乱した妄想にすりかわっている。バルザックにとって，削除は作品の均衡を失わせ，一種の去勢行為ですらあったのに，ベルニー夫人の助言に従っている。現代の読者から見れば，オリジナル版のモルソフ夫人の方が，はるかに人間の真実に近いのに，バルザックが敢えて削除したのは，小説に，清純—不純の明確な区別を求める当時の一般読者（＝ベルニー夫人）の目を恐れたためである。このように彼は，読者の中傷，非難を恐れるあまり，当時の政治・宗教・道徳に敬意を払ってはいるが，一方，いかにそれを迂回し，転覆させるかにも腐心し，それが，バルザックの文章に多義性を与えているのである。

第五章《Le Texte balzacien》では，バルザックの幾つかのテクストの生成過程を検討し，様々なヴァリアントが，バルザックの，時には相矛盾する複雑な倫理を解き明かす手掛かりになることを証明している。特にモゼは最後の項で，バルザックが，一つのテクストに，草稿やヴァリアント，訂正を加えた校正刷り等，膨大な avant-textes を残したのは，読者に様々な解釈の可能性を与えるためであったと，解説している。作品が忘却されないためには，多くの読者に読まれねばならないが，読者に勝手に歪曲される恐れがある。その危険を回避するためにバルザックは，あえて数多く書くこと，全てのジャンルを包含することを目指したのであり，モゼは，『人間喜劇』を，様々な意味を引き出すことの出来る，多形の，永遠に変化する有機体とみなしている。バルザックには例えば，多くの作品を書きなぐる悪文書きというイメージや，逆に，完璧な文章を求めて，校正や手直しに悪戦苦闘した末，勝利を勝ち取った超人のイメージがある。後者の場合，出来上がったテクストのみが重要で，avant-textes は，単なる模索段階の誤謬でしかない。モゼはこうした，一枚岩のバルザックを拒否し，むしろ，『人間喜劇』の特徴である過剰さを肯定的にとらえ，そこに，彼の現代性を見出した。モゼは本書を締めくくって，次のように語っている。

「バルザックは，極端なもの全てを両立させようと最も努力した人物として，彼の世代の詩人，散文作家の中で恐らく，最もロマンティックな存在であろう。彼は，伝統的な文化に注意深く耳を澄ます学者であり，女になることを夢見る男でもあり，子供時代の世界を決して忘れない大人でもある。バルザックにおける全体化とは，力への意志よりもむしろ，こういった意味におけるものなのだ。」

従ってモゼは，一つの原理の収斂させようとする還元的な読書ではなく，様々な視点からテクストに何度もアプローチする《lecture recommençée》を勧めている。本書の表題（*Balzac au pluriel*）が示す通り，本書自体が，このような視点に基づいたテクスト批評の実践となっている。

本書は，1979年から1987年にかけて，様々な雑誌に掲載した記事をまとめたもので，そのせいか，多少，論旨が重複する部分で，章ごとの纏まりに欠けるところが見られ，また，一部のテクスト分析に関して，掘り下げが足りない部分も見受けられる。しかし，テクストの多義性に重きを置くテクスト批評は，

新しいバルザックの発見に導くと同時に，他の作家の作品にも，新たな光を当てることが出来るのではなかろうか。